島原市報道資料

令和３年５月２６日

報道関係者　各位

島原市市長公室
秘書人事課

雲仙・普賢岳噴火災害３０年犠牲者追悼式の式辞及び遺族代表挨拶について

「雲仙・普賢岳噴火災害３０年犠牲者追悼式」の式辞及び遺族代表挨拶について、別添のとおりお知らせします。

なお、記事等への解禁日時は、６月３日の追悼式終了後としますのでよろしくお願いします。

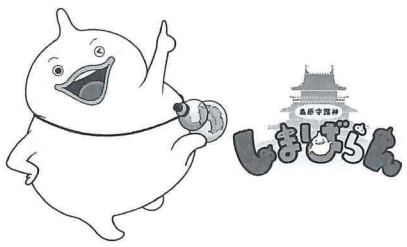
記

１　式　　辞　　島原市長　古川　隆三郎

２　遺族代表挨拶　　大町　寿美（おおまち　すみ）　様（故　大町　安男　様の奥様）

３　解 禁 日 時　　６月３日（木）追悼式終了後（午前１１時終了予定）

担当：島原市 秘書人事課 秘書班　担当 平田
電話：0957-63-1111（内線 122）
E-mail：hisho@city.shimabara.lg.jp



島原守護神キャラクター
「しまばらん」

【雲仙・普賢岳噴火災害３０年犠牲者追悼式　市長式辞】

雲仙普賢岳噴火災害３０年犠牲者追悼式を執り行うに当たり、ご遺族の皆様並びに長崎県知事 中村法道 様をはじめ、多くのご来賓の皆様のご列席を仰ぎ、４４名の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

平成２年１１月１７日、有史以来三度目、１９８年ぶりに雲仙普賢岳が噴火しました。

犠牲となられた４４名の御霊におかれましては、度重なる土石流や火砕流など火山活動に伴う災害から、市民の生命や財産を守るため、また災害状況の取材や火山活動の研究などのため、それぞれの業務に従事され、昼夜を分かたず、献身的な活動を続けておられましたが、平成３年６月３日、それまでの規模を大幅に上回る火砕流により職に殉じられ、ついに帰らぬ人となられました。

皆様方はまだまだお若く、将来に夢を託しながら使命感に燃え、職務に全力で励んでおられたなかで、最愛の奥様を、愛しい子供さんを、優しいご両親を残し、志し半ばにして犠牲となられた無念のお気持ちを察しますとき、また最愛の肉親を亡くされたご遺族の、なお癒えやらぬご心情を察しますとき、万感胸に迫り、申し上げる言葉もございません。

この噴火災害が、我が国の火山災害史上類のない大規模で、しかも長期に及んだ災害であったため、市民の心に、さらには暮らしに、深い傷跡を残しました。

島原市では、犠牲者の方々の追悼と、災害を風化させることなく後世に伝え復興を祈るため、そして尊い犠牲を無駄にしないよう、市民等しく決意を新たにする特別な日として６月３日を「いのりの日」と位置づけております。

あの日から３０年という歳月を積み重ね、国・県の絶大なご支援や、全国多くの皆様からの心温まる励ましにより、様々な復興事業が推進されてまいりました。

とりわけ、砂防・治山ダム群をはじめとする防災施設が整備されるとともに、

避難道路として、「島原深江道路」や「島原中央道路」が完成し、現在は島原から諫早までを結ぶ「島原道路」の事業推進を図っているところでございます。

また、平成新山の山頂には１億㎥もの溶岩ドームが、今もなお不安定な形で覆いかぶさっており、今後も引き続き崩落対策が重要な課題でありますが、国土交通省雲仙砂防管理センターのお力添えをいただきながら、防災監視機能の強化などを講じていただいているところでございます。

今後は、多大なるご支援により整備された防災体制をさらに強固なものとするため、災害当時、住民同士が助け合いながら苦難を乗り越えた教訓を振り返り、地域住民が主体となった実行力のある自主防災組織を再編し、さらなる防災体制の強化を推進してまいります。

そして、そのことが犠牲となられた皆様方へのせめてもの供養であると信じております。

現在、新型コロナウイルスが猛威を振るい、全世界で３００万人以上の尊い命が犠牲となるなど世界規模の大災害となっております。日本でもウイルスの感染が拡大している状況でありますが、一日も早く感染が収束し、安心して過ごせる日常が戻ることを祈っております。

大自然の営みが時として引き起こす脅威を歴史から学び、一方で豊富な湧水や温泉、新鮮な農産物や海産物など、まさしく火山が育んだ大地の恵みを大切にし、さらに魅力を引き出し、地域を活性化していくことで、災害で得た経験を後世につなげたいと思っております。

終わりにあたり、犠牲となられました皆様方の御霊が、とこしえに山紫水明なふるさとにとどまり、在天の光となって、ご家族の繁栄並びに島原市の発展に、限りなきご加護を賜りますよう祈念申し上げ、併せてご遺族皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げまして、式辞といたします。

令和３年６月３日

島原市長　古川　隆三郎

雲仙・普賢岳噴火災害30年犠牲者追悼式　遺族代表挨拶

遺族を代表いたしまして、一言お礼のご挨拶を申し上げます。

本日は、このように盛大でしかも厳粛な追悼式を挙行してくださり、本当にありがとうございました。心からお礼を申し上げます。

また、長崎県知事の中村法道様をはじめ、多くのご来賓の皆様には、ご遠方から、また大変ご多用の中にご出席を賜り、私たち遺族は大変ありがたく存じておりまして、故人もさぞかし感謝しているだろうと思います。

月日の経つのは本当に早いもので、大切な家族を失った大惨事から３０年が過ぎました。

私は噴火災害で夫を亡くしましたが、いつもそばにいてくれた人が、突然帰らぬ人となったあの日のことが、頭から離れることはありません。

私たち遺族は、深い悲しみを背負いながら過ごしてきましたが、ここまで立ち直ることができましたのも偏に、国・県・市をはじめ、全国たくさんの皆様からの温かいご支援のおかげだと、心からお礼を申し上げます。

あの日から長い月日が経ち、遺族の世代も移り変わってまいりますが、これからも、親から子、子から孫へ噴火災害の脅威を新しい世代へ伝えていき、災害の歴史を風化させることのないよう努め、そして、火山と共存できる街づくりと島原半島の発展に貢献出来るよう私ども遺族も頑張ってまいりたいと思います。

終わりに、古川市長様を中心に島原市のますますのご発展と、ご来賓の皆様、市民の皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げまして、お礼のご挨拶とさせていただきます。

本日は、本当にありがとうございました。

令和３年６月３日

遺族代表　大町　寿美